公文書館の普及活動と展示
ー理解者層と利用者層の拡大を目指してー

秋田県公文書館　柴田　知彰

はじめに

平成８年に秋田で開催された第22回全国大会は、「史料保存への理解を求めてー文書館制度の普及」がテーマであった。大会では、様々な角度から報告と討論が行われた。しかし、公文書館の全体業務の中で、普及活動が明確に位置付けられるまでには至らなかった。また、公文書館に対する一般の理解を広げる普及と、収蔵史料の利用を進める普及とがテーマ上で区分されないまま、話し合いが行われたようでもあった。普及活動については、館業務上での位置付けを明確にした上で、目的を或る程度区分することが必要である。

一方、平成２年の第16回大会で、中野等氏より柳川古文書館の展示活動につき報告が行われた。その際、展示における公文書館のアイデンティティが初めて論じられた。中野氏は、地域史的テーマから離れて、「史料とは、文書とは何であるか」を一般市民に理解させることにアイデンティティを見出した。しかし、地域史的テーマに基づき収蔵史料の内容を紹介する展示も一概には否定出来ない。

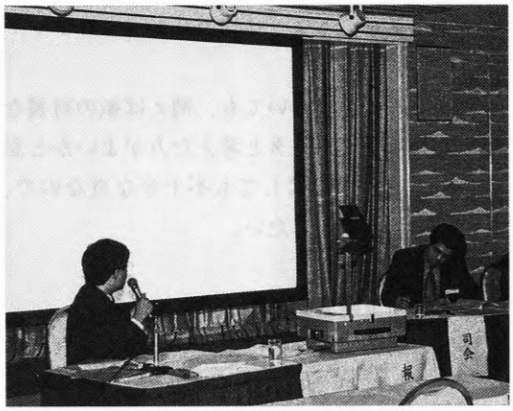
1　公文書館の普及活動

(1)　普及活動の位置付け

安藤正人氏は、公文書館業務につき、調査収集・整理記述・保存管理・利用提供の４段階を設定した。この４段階の業務は、個々に存在するものではなく、史料管理という大きな業務の部分的プロセスと考えられる。史料管理が公文書館の本来的業務である以上、そのプロセスも本来的業務と見做せる。各プロセスが本来的業務であれば、それに属する具体的業務も本来的となる筈である。故に、利用提供プロセスにおいても、その具体的業務である普及活動は本来的業務となる。

(2)　普及活動の対象者層

普及活動の目的として、「理解者層拡大」



と「利用者層拡大」の二つを設定すると効率的な普及が出来るであろう。理解者層は「館の存在意義や役割等を理解している人びとの層」、利用者層は「館を実際に利用する可能性を持つ人びとの層」と定義してみたい。

この両層は図書館と博物館についても設定出来る。両館の理解者層は、ほぼ社会全体に広がっていると想定される。これに比し、公文書館では理解者層の広がりが遙かに小さい。理解者層の少なさは、利用者層にも影響を及ぼしている。また、理解者層は公文書館の社会的存在基盤としても重要である。

故に公文書館の普及活動では、両層の拡大が常に意識されるべきである。これらは一方に偏らず、同時併行で行われねばならない。

2　公文書館の展示活動について

公文書館の展示活動については、準備に時間と労力を取り、日常業務を圧迫するとの声が多い。また、歴史系博物館の展示との境界が曖昧とも言われてきた。その結果、「展示は非本来的業務」との批判が起きるに至った。しかし、展示が普及活動の有効な手段であり、本来的業務であることに変りはない。

第一の問題は、展示活動を日常業務の中に組み込み、他業務と連動させることで解決出来ると思われる。実施回数も、他業務との連動が可能なように設定されるべきである。

第二の問題は、展示に公文書館のアイデンティティを確立することで解決出来る筈である。安藤氏は「記録史料学とアーキビスト」(『岩波講座　日本通史』別巻3　1995) において、アーキビストの研究領域を記録史料学としている。それ故、アーキビスト即ち公文書館職員の展示活動領域も記録史料学となる。公文書館のアイデンティティは、展示が記録史料学の領域で行われた時、初めて明確になる筈である。

記録史料学は、記録史料管理論と記録史料認識論の二領域から成る。管理論の領域で展示が行われると、文書の修復保存方法や館業務の紹介などが中心となり、アイデンティティが明確になる。中野氏の実践例はこの領域の展示であったと考えられる。認識論の場合、記録史料学と歴史学とが重なる領域に在る。故に、意識的なアイデンティティ確立が必要となる。上記二領域での展示は、理解者層と利用者層の拡大普及にそれぞれ向いている。

記録史料学の領域に依拠する考えが、展示の可能性を狭めるとの意見も有った。が、むしろ展示の可能性を広げる目的で、展示論の基礎に記録史料学を置いたことを付け加えたい。従来、公文書館展示の改良運動は、管理論にアイデンティティを求める傾向に在った。これに対し、認識論とのバランスを考えたのが本論である。

両領域の展示は、理解者・利用者両層の拡大を目的とし互いに補完し合う関係であり、決して否定し合うものではない。この考えを基本に置いた上で、バリエーションとして展示の可能性を追究すべきである。

3　平成9年度企画展の計画と実際

平成9年度の企画展「県庁文書で見る秋田の鉄道史」では、上記の考えに基づき展示計画を行った。展示を二部構成とし、前半で鉄道関係史料を紹介し、後半で公文書館の業務等を紹介した。前半が利用者層拡大のための認識論の展示、後半が理解者層拡大のための管理論の展示である。

前半部分では、公文書館のアイデンティティを明確に出すため、史料群展示を意識した。鉄道の歴史を、ただ文書で辿るだけでは博物館展示との境界が曖昧な儘である。そこで、展示を「史料群ショーウィンドー」と考え、公文書館が所蔵する鉄道関係史料群の内容を分析紹介する方法を採った。史料群の分析は、公文書館固有の業務に近い。これを展示に反映させることで、博物館展示との境界が明確になる筈である。展示の主役は、「鉄道史」より「鉄道関係史料群」とされた。

県庁文書の鉄道関係薄冊は、大部分が土木行政担当部課で作成されたものである。また、官

設鉄道敷設が国の仕事であったため、県庁文書の史料的限界も大きい。しかし、企画展では欠落部分を交通博物館等からの借用で補わず、むしろ史料的限界を前面に出してみた。利用者への収蔵史料紹介が目的ならば史料内容を有りのまま正確に展示説明すべきである。展示の導入は、作成部課の解説から始めた。

さて、展示を計画する際、メインの対象者の設定が重要となる。設定次第で、展示の表現手法等が左右されるためである。9年度の企画展では、理解者層と利用者層両方の拡大を狙った。そのため、メインの対象者を両層の境界線に近い「初歩的段階の利用者」と設定してみた。これにより、展示解説文も噛み砕いた分かりやすい表現となる。

更に「文書展示の難しさ」を克服するため、「初歩的段階の利用者」を具体化した漫画的キャラクターを展示の案内役とした。キャラクターは女子大生の設定とし、バック・ストーリーには、公文書館で鉄道関係の県庁薄冊を比べてレポートを作成する過程を考えた。その他、解説パネルの地をパステルカラーにし、マンガチックな丸い字体を用いるなど、表面的な工夫で固いイメージの払拭に努めた。

実際の展示準備では、他業務との併行を考え、分業体制による作業省力化を目指した。準備作業を分析し、ソフト作成（レイアウト、キャプション等原稿執筆）とハード作成（パネル、看板等作成）と外部交渉（業者発注、マスコミ連絡ほか）に分業した。

おわりに

平成9年度企画展では、展示室内でアンケートを実施し普及効果の調査を行った。分析結果、展示による理解者層拡大は、或る程度の成果を認められた。展示を契機とし、鉄道関係史料を閲覧する利用者も現れた。普及の戦略としては概ね成功したと思われる。しかし、より効果的な普及のためには、戦術として展示手法等の開発が一層求められるであろう。また、普及活動全体の中で、理解者層と利用者層双方の拡大を考え、各活動を機能分担することも必要である。